

INDEX

- 1 うちなーからの南風～「沖縄戦終結60年」 重島雅弘
- 2 高橋弘のモルモン人物伝(番外編)  
ジョン・クラカワー再考：モルモン教こそ「原理主義」である
- 3 投稿 「モルモンからカトリックへの回心への道」  
(ガーマントからロザリオへ、苦しみから喜びへ) - 下 -  
St francis of Assisi
- 4 連載 リアホナを斬る (第7回)木塚灯八  
2005年10月号 大管長会メッセージ「無数の愛の糸」
- 5 ニュース

うちなーからの南風～「沖縄戦終結60年」 重島雅弘

沖縄では終戦記念日までの間、地元のメディアがいろいろな特集を組んでいた。どれもすばらしい記事や番組だった。日本国内において、唯一、「地上戦を経験している沖縄」とも一言で語りつくせることなどできない「うちなんちゅー」(沖縄人)の思いと経験が詰っていた。沖縄へ越して来て早4年、ここでの生活の月日がたてばたつほど、彼らの思いや経験も少しずつ理解できてきたように思う。これは、住んでみないと解らない事だと思う。沖縄に住んで「沖縄の戦争」の歴史を肌身で感じ、また、在日米軍基地を日々、目の辺りにすることは、私にとっても、また、私たち家族にとっても本当に貴重な経験だと思う。

仕事をしているとよくラジオから「さとうきび畑のうた」が聞こえてくる。沖縄戦の思いを歌にした有名な作品である。この曲をこの地で聴くと私はいつも目頭が熱くなる・・・。沖縄の方々には本当に先の大戦で苦勞されたんだなあ。一。被害者なんだなあーと考えさせられる。この様な話もある。内地(本土)より、毎年、遺骨収集に訪れている方の経験だが、地元の方に「こんな連中の(大和の兵士)骨なんか拾うな!!」「我々が彼らにどれだけ苦しめられたかわからん・・・。」と幾度となく罵声をあびさせられたと言う。また、私の知人のうちなんちゅーは「アメリカは私たちに(戦後)支援をしてくれたけど、大和(日本)は苦しみだけ与えて何もしてくれなかった・・・。」と話してくれた事もあった。もちろん、悪いのは日本本土の人間では無い。「戦争」が人を変えてしまったのだと思う。戦後処理は「韓国」や「中国」に対してだけではなく、「沖縄」に対してはまだ終わっていないと私は感じている。

そんな話や記事を聞いたり読んだりする時、「こんな綺麗な海とすばらしい文化のある場所を戦場にしてはいかんよ」と私は強く思う。いや、場所ではなく、戦争なんて起こしてはいけなくて改めて思う。戦争当時だけではなく、今現在も多くの苦しみがこの地に残っている事は事実であり無視できるものでもないそして、決して忘れてはならない事だと思う。レベルや規模の差こそあれ「カルト宗教」も全く同じだと私は思う。多くの人々の時間・労力・財産・価値観を奪い取り、逆に何も与えない。また、何ひとついい事はない。(残念な事にマインドコントロールに陥っている時は、多くのものを与えられていると感じる・・・)そして、教団へ異を唱えればそれまで、一刀両断でスパッとされる。今までの教団に対しての労のねぎらいの一言も無い・・・。私にとって「戦争」も「カルト」も二度とノーサンキューである。この二つの物は、私たちにとって必要なものであるはずはない。

高橋弘のモルモン人物伝(番外編)

ジョン・クラカワー再考：モルモン教こそ「原理主義」である

「われわれの指導者が語る時、思考することは終了したのである。指導者が計画を提案したとき、その計画は神の計画なのである。指導者が道を示したなら、それ以外に安全な道はない。指導者が方向を指し示したなら、そこで議論は終了したことを意味している。神はそれ以外の方法で働かれることはない。指導者が示したことと異なることを考えることは、そのことを即座に反省・改悔するなら別だが、(モルモン教の)信仰を失うことであり、自分の信仰告白を破壊することであり、神の国には入れないのである」

(Improvement Era, June 1945・・・Ensignができる以前の教会雑誌)

ジョン・クラカワーの『信仰が人を殺すとき』で取上げられたモルモン原理

理主義者は10万人)は、モルモン教の中のやや特殊集団と受け止められているが、はたして本当にモルモン原理主義者だけが原理主義なのだろうか。クラカワーはその著書で強調したことは、原理主義者ラファティ兄弟の思考と行動は、メイン・ストリーム(本流)のモルモン教と異なっているわけではなく、むしろ連続しており首尾一貫しているのだ、という点だった。つまり原理主義者の意識と行動は、体制派であるソルト・レークのモルモン教と基本的な点で多くの共通項を持っている、ということである。

今回このコーナーをお借りして、モルモン教が絵に画いたような原理主義であることの根拠を挙げてみたいと思う。というのは今日、モルモン教会の不幸の多くが、この原理主義的ありかたによってもたらされていると思われるからである。

「エンターテインメント・ウィークリー」誌のインタビューのなかで、ダン・ラファティは狂気だと思うかと訊かれ、クラカワー氏は「ダンが狂気だとは思わない。ジョン・アッシュクロフト(前司法長官、経済学者ポール・クルーグマンは彼を史上最悪の司法長官と見ている)が狂気でないならダンも狂気ではない。ダン・ラファティとジョン・アッシュクロフトの違いは大きくはない。もちろんアッシュクロフトはモルモン教徒ではないし殺人を犯してはいない。しかしジョン・アッシュクロフトは原理主義者(聖書原理主義者)であり、二人の信念体系は驚くほど似ている。そのことが私には恐ろしい・・・」と語っている。この指摘は正しい。

また9・11以来、アメリカ人はイスラム原理主義を理解しようとしてきたが、それとモルモン原理主義とは関連があるかと訊かれ、クラカワー氏は「すべての原理主義は同じだ。大きな違いはない。私は刑務所でダン・ラファティに会い、オサマ・ビン・ラディン(イスラム原理主義者)と君とはどこが違うのか、と尋ねてみた。ラファティの答えは、彼らは間違っているが、私は正しい、だった」。このラファティの答えのように、原理主義者は自分の正しさを頭から信じており、それを微塵も疑うことはないのである。

\*\*\*\*\*

原理主義者は世界のどの宗教にもみられる現象だといわれており、昨今、テロリズムと関連してイスラム原理主義が世間の関心をかった。では「原理主義」のどこが危険であり、どこが誤りなのかということについて触れながら、モルモン教が一貫して原理主義であったことを証明することにしたい。

原理主義者にはいくつかの大きな特徴がある。まず、自己の絶対化、あるいは独善性である。原理主義者はアプリアリに(しかるべき根拠なく)自分が正しいと主張する。自分が正しいことの根拠は、自分は直接神の声を聞いたとか、自分は神に選ばれたのだとかという、本人の申告・主張である。モルモン教自体、大小数百の「分派」に分かれ、それぞれのグルが神からの直接の声を聞いたと主張し、他の分派は誤りであると主張している状況が出現している。しかし、こうしたインスタントに発生する自称グルの殆どは独善のかたまりであり、自己欺瞞である。その結果、グルとそれを取り巻く信者たちが、その周りの人々や社会に不幸をばらまくようになれば、話は宗教のレベルでは収まるわけがなく、法や司法がかかわらざるを得なくなるのである。

ビン・ラディンはテロを繰り返して、プッシュヤ政権(プッシュヤアッシュクロフト、ラムズフェルト等)は破廉恥にも世界各地に干渉し戦争を仕掛け破壊するといった国家規模のテロを続けている。これに対しては、国際司法裁判所から違憲判決が下されている。こうした行為は宗教の名を借りた一人よがり、たんなる自己欺瞞、詐欺に他ならない。モルモン教の初期の歴史をみれば、スミスやヤング等の指導者たちはモルモン教こそが唯一正しいキリスト教であり、他をすべて間違い・誤りとだと主張してきた。しかし今日モルモン教会はモルモン教もキリスト教の一派なのだ、と控えめな要求をしている。にもかかわらず信徒に対しては依然とモルモン教こそが正しいキリスト教だという立場を崩していない。

第二の誤りは、神は自分たちの側にあるという主張である。あるいは、神は自分たちを通してのみ世界に働きかける、という主張である。これは、神という存在を私物化し、たった一握りの人の専売特許にすることであり、神を限りなく小さな存在に矮小化することである。神は彼らにも働きかけるかも知れないが、いつでも他の様々な人々にも働きかけうる可能性を認めながらない。こうした点から考えれば、原理主義者は非常に心の狭い、非寛容な人である。

第三の誤りは、原理主義は、神の真理を入手した、救済の方法を知っていると主張し、しかも、彼らの知る真理・救済こそ、唯一の真理・救済だと主張する点である。彼らの信ずる真理から外れた人々を救済から洩れた無意味な存在とみなす。統一協会の場合は、一般市民から金銭を騙し取ることを、「フッキ」と称して推奨している。原理主義者の非寛容な態度、他への攻撃的態度、他の宗教や信徒を無価値なもの、むしろ利用すべき存在と考える思考パターンはこのような背景から生まれる。

真の宗教は「己の欲せざるところを他にも為すなかれ」とか「自分が他の人からして欲しいと思うことは、他にもそのようにしなさい」という黄金率に達するが、原理主義はむしろ他を敵とする二元論的思考に走る。教理や原理への盲従・服従が強調されるため、教理や原理と「愛」「同情」「思いやり」など対立が起るとき、原理主義はかならず教理や原理への盲従を選択するよう迫られるため、こうした原理主義的宗教からは「温かい」人間味が急速に失われていくのである。ブリガム・ヤングがユタの統治をしている間、ヤングはモルモン教の無法者(ビル・ヒックマンやポーターロックウェルなどモルモン教会のために熱心に働いた殺し屋たち)に対し殆ど無制限な自由を与えていたが、指

心でなかった多くの信徒たちがいとも簡単に殺されていった。  
第四の誤りは、原理主義は信徒に、指導者と原理（教理）にたいする盲従を強いる点である。この理性や対話を無視した盲従の要求こそ、原理主義やカルト宗教の特徴であり、また危険性である。真の宗教者が弟子や信徒に盲従を強いることはまれである。自覚的、自主的な決断と行動こそ、信仰するものにもっとも要求されることではないかと思う。古代の哲学者ソクラテスは、むしろ宗教指導者ではないが、弟子たちとの対話を通じて弟子を真理に導いたが、これはイエスがその弟子たち（ペテロとかヨハネなど）との対話にも見られる、真の宗教指導者の見本である。イエスは弟子が理解できるようにと多くの喩えを使って語った。そして弟子たちに「あなたはどう思うか？」と、最後の判断・決断を弟子にまかせている。

上にエビタフとして引用した言葉は、モルモン教団本部の発行する雑誌の記事であるが、これはまさに信徒に思考の停止を要求する言葉であり、指導者への只管なる盲従を呼びかける原理主義者の言葉である。これと似たような言葉が繰り返して教団指導者の口から飛び出していることから分かるように、モルモン教は昔から依然として変わらぬ原理主義的宗教なのである。モルモン教会は、疑問、反論、異論、対話を問答無用で締め出す。

最後に指摘しておきたいことは、原理主義者の宗教にたいする過剰なまでの熱心さ・熱意である。パレスチナから撤退することを執拗に反対するユダヤ教原理主義者や、聖地に勝手に侵入するアメリカ等の外国勢力に対するイスラム原理主義者のジハードの戦いや、自分の信仰を絶対視して他宗教を異端と考えるブッシュの短絡思考など、熱心さの表出は様々な形をとる。宗教的な熱心さはそれ自体がけっして悪ではないが、しかし、それが自己絶対化や独善性と結びついた場合、宗教は往々にして攻撃的、暴力的性格を帯びるようになるのである。

投稿 「モルモンからカトリックへの回心への道」  
(ガーマントからロザリオへ、苦しみから喜びへ) - 下 -  
St francis of Assisi

(前号より)  
前号(2005年7月15日発行)はこちらから  
<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

#### 探求

退院してからはいわゆる不活発会員になりましたね。モルモンからしつこく訪問されましたがそのたびに住所変えたりしました。もう彼らとはつきあいたくなくなったから。

もう便利屋はごめんです。モルモンの態度はまるでストーカのようでしたので、ますます彼らに対しての気持ちは離れていきました。

ちゃんとアポイントを取らずに来るなどの非常識な態度は、私の両親も激怒させました。

特に父は古風な日本男児で礼儀作法に厳しい人なので、あまりにも非常識なモルモンに激怒し、親戚一同とともにすっかりモルモン嫌いになりました。

父は日本神道の教えに忠実ですので、お酒を神聖なものとする人でもありません。好意で出した酒を地べたに捨てられ、彼はモルモンに「もう来るな！」って叫びました。

母の天台宗の信者ですが、カトリックには好感をもってましたが、モルモンは“変な人たち”って嫌がってました。

いろいろな他の教会に顔をだしてみました。ルーテル、バプテスト等。仏教のお寺にも行きました。神道の神社等にも顔を出してみました。座禅してみてもその生活のとても質素で自然な姿に感銘を受けたり、ギリシャ正教会のイコンが美しかったり。イスラームの人たちとも友達になったし、Goldman Sacksにヘッドハントされたのでそこでユダヤ系の人たちと仲良くなったり。

宗教の違いなんて問題じゃなかった。みんないい人で明るい。こんな彼らがモルモンの教義だと救われないなんてとても信じられなかった。

そしてふとフランシスコ会の修道院の小さなカトリック教会に行きました。それが私とカトリック、そして私が自分の洗礼名にするほどその生き方に感銘を受け、今の快活さと安らぎをえた聖フランシスコ、聖コルベとの出会いでした。

カトリック、聖フランシスコに出会う

今私の前にはひとつのロザリオがあります。不思議な縁でモルモンからカト

就職が決まって社会人になるころ、私はある映画を偶然見ました。

カトリックの神父様（コルベ神父様）がああ悲しい悲惨なアウシュビッツで、ある一人のポーランドの軍人のために身代わりに自分の命と引き換えに彼を助けた話。ひどい扱いをされたナチスの監獄長に顔をめちやくちやになるまで叩かれてもおだやかに接した人。

アウシュビッツの牢獄の極限状態の中、人間不信の中で最後まで愛をしめした人。感銘を受けた私はそこでちょっと近くのカトリック教会に行き、その頃は使い方をわからずにロザリオを買いました。神父様にお願いしてカトリックのお勉強を始めましたが、その時は就職先がその教会から遠いところだったので、カトリックとの縁もいったん途切れしました。また元のモルモンの教会に通い始めましたが、なぜかそのロザリオは「たんなる装飾品」として持ってました。

そして20年後、再びフランシスコ会の教会を訪ねた私は、その教会の神父様がコルベ神父様と関係のあるコンベンツアル聖フランシスコ修道会の神父様であることを知りました。その神父様が私とロザリオを見て「まるでコルベ神父様があなたをここに呼ばれたようですね」って。

その神父様のもと、カトリックの勉強をモルモンの教義と比較しながら勉強し始めました。

そこでの勉強および信者の皆さんとの交流は、私にとっては一番心安らぐものでした。みなミサにくることを強制もしないし、カトリックを強要もしない態度はとても心地よいものでした。

その穏やかな雰囲気には癒されて段々と体調も回復してきました。とても堅苦しいと思っていたカトリックは、全然そうではありませんでした。ああこれが私の思い描いた生活だなんて思いました。

聖堂の静かな雰囲気。ミサの美しさ。信者の優しさ。そして信者に優しいそしてBlackもYellowも差別されない雰囲気。

いつもイエス様のことだけを考えていれば良いおだやかな日々。

第二バチカン公会議の後のカトリックは、他の宗教に寛容な自己改革をなししていました。その意味でも、頑迷に自己の正当性ばかり主張して、一向に自身の冒した過ちを認めようとしない頑迷なモルモンとの宗教団体としての「器の差」を見ました。

2人の神父様のうち年上の神父様は学術肌で、私の疑問にとても誠実に答えて下さり、代わりに私がパソコンをお教えしました。今でもメールのやり取りをよくします。

もう一人の神父様はご自分でバンドを組んで歌ったりと、良い意味で型破りの方でした。子供たちにとても人気がありました。もちろんお二人ともミサの時はとても真剣でした。

このような中私はアッシジの聖フランシスコの魅力にとりつかれておりました。

動物が大好きで小鳥を飼育して可愛がったり、いろいろなペットを飼って可愛がっていた。

そしてアウトドアスポーツが大好きで自然保護の活動などをしていたので、聖フランシスコのことがとても好きになりました。

映画「ブラザーサンシスタームーン」の中での彼の虐げられている人たちに対する愛情、とても素朴な生き方は私を偏狭なモルモンの呪縛からどんどん取り去っていきました。

そしてその思いは私をイタリアへの巡礼へと駆り立てました。

イタリアのアッシジでの美しい自然と聖フランシスコゆかりの土地で、ついに自分の求めていたものを見出しました。洗礼名をコルベにするかフランシスコにするか、、、迷いに迷いフランシスコにすることに決めました。

ローマ法王との謁見（モルモンのPresidentとの比較）

私はモルモンの大管長そしてローマ法王の両者とすぐ近くでの印象を感じ取った人間でもあります。

私は大学時代をニューヨーク州のローチェスタで過ごしました。モルモンの大管長 スペンサー・W・キンボールがPeter Whitmerの農場を奉獻する大会に

した。Yellowということで私ははるか末席。そのころは熱心だったモルモンでしたので私は彼の写真をとるため一生懸命。その時大管長のボディガードの一言「Get Lost, Yellow Monkey!」  
そして大管長はまるで汚い猿でも見るような一瞥を。

とても悲しかったです。

モルモンの人種差別はひどかったけどそこまでとは、、、。嘘だと思えばその時の写真ありますよ。ひどいものですね、、、。

同じようにイタリア巡礼でローマ法王ヨハネパウロ2世にお会いしました。私たち巡礼団の中に車椅子の人がいました。

そしたら法王様がなんとわざわざその人のもとに近くに寄られて、日本に來られたとき覚えられた片言の日本語で一生懸命話し掛けられました。

そして私たちの顔を見てにこにこしながら「Kami ni kansha(神に感謝)」って声かけられてました。大きな白熊さんのようなとてもがっちりした方そして笑顔の優しい方でした。

法王様が亡くなられたとき沢山の人が慶弔におとずれましたね。その気持ちは私も同じ。こんなすばらしい方がカトリックの頂点に立つというのはなんて素晴らしいことか。

残念ながらそこでもモルモンとカトリックの「器の差」を見てしまいました。

その時カトリックに対しての私の気持ちは「これのどこが悪魔の教会??? 2千年という時の重みと伝統、そして世界10億人といわれる信者、、、そして優しくて偉大な法王様。

確かにカトリックは沢山悪いこともしたけどちゃんと反省もしている。私もその中に加わろう」って思いました。

ローマの遺跡群をめぐりコロッセオなどを見ながら、あるひとつの決定的なBook of Mormonのどうしようもない創作としか思えない部分に気が付きました。

クモラの丘付近で学生時代を過ごしていた私は、夏は夜10時ごろやっと暗くなり、冬はとても寒くダイヤモンドダストが出るほど、雪もものすごく降るこの土地で起こったといわれる6世紀のころの大規模な戦闘は理論的な側面があり、とても出来ないのでは?さらにこのようにローマでは1世紀ごろの街道が普通の道路として今でも使われて遺跡もちゃんと現存しているのに、クモラの丘付近にはそれらしい遺跡も戦場あともなんにもない、、、Josephの創作じゃないの???って。

今の私

とても幸せ。常に神様に愛されているって感じてます。神父様もとてもたのしくて、説教の時皆から笑いもでるほどです。信者もみな明るくのびのびしてますね。神様によって救われたという安らぎは私を快活にしています。本当のイエスは裁く方ではなく許す方。モルモンの教えているあんな恐ろしい方じゃないってわかったから。

結び

つたないですが、これが私のモルモンからカトリックへの回心の経験です。私はたまたまカトリックになりましたが、カルトの傾向のある団体でなければ、ルーテル派などのプロテスタントでも他の良き宗教でも良いのではないかと。

カトリックのみが真実ではなく、今の私は人間が理解するにはあまりにも理解不能な大いなる神様を、カトリックは左から、プロテスタントは別な側面から、仏教はやはり別の側面から、イスラームは右からなど。結局はどの道でも、誠実な人は神様の慈愛に満ちた恩恵を受けているという思いがあります。

お互いが自分のみが正しいと主張する偏狭なものの考え方自体が間違っているのではありませんか?

アッシジで世界中の宗教家の人がたびたび集まって、お互いの相互理解を深めています。その中に果たしてモルモンは入ることができるのでしょうか?もし頑迷な自分のみを真実とする、パリサイ人顔負けの傲慢さを除けば入れるかもしれませんね。個人的には悲観的ではありますが期待しております。かつて熱心なモルモンだったものとして。

St francis of Assisi  
ロザリオと共に。

(完)

大阪の南海電鉄なんば駅を出たところから年中「閉店セール」をやっている店があります。「本日限り、本日限りのお買い得、定価 円の商品がなんと割引、本日限りで閉店しますので商品一掃セールを行っています。18年間ご愛顧ありがとうございました、さあ本日限りの閉店セールです」この店はこんな調子で毎日閉店セールをやっているのである。大阪の人間にこういう商法を許してしまう大らかなところがあるのか、はたまた何も知らないで騙される人間が多いのかは分かりませんが毎日大繁盛している様子です。ウソのようなホントの話です。この店と同様にモルモン教会も末日だ、世の終わりだと言いつづけて百数十年、教祖ジョセフ・スミスの誕生から200年経ってしまいました。

前置きが長くなりましたが、さて今回はリアホナ2005年10月号の大管長会メッセージを取り上げてみます。これはジェームズ・E・ファウスト第二副管長からモルモン教会の会員に向けての子育てに関する説教です。

まずファウスト長老は親と言うテーマに関しては親の数だけ意見がある、としながらも、父親、母親と言うのは重大なばかりでなく神から与えられた神聖な使命であるとしてモルモン会員に認識させることから話を始めます。そういつかときにモルモンの幹部がよくやる手法ですが、自分の話に箔をつけようとして聖書の一節を引用します。ここではファウスト長老が、新約聖書ヨハネ第3の手紙4節から『わたしの子供たちが真理の道を歩いていることを聞く以上に大きい喜びはない。』という聖句を引用しています。しかしこれは自分が教えた弟子や後輩を『わたしの子供』と呼んで彼らの成長を喜んでいる言葉であつて、子育てに関する聖句ではないと思ひます。前後の文章を読めばそう思うのですが、なぜファウスト長老はこのようなおかしな引用をするのでしょうか？まるでパソコンの検索機能で「子供」と打ち込んで見つけた聖句をそのままコピペしたかのようですが、それは私の思い過ごしでしょうか？

まあそれは些細なことなので次へ話を進めます。ファウスト長老の話によれば現代社会は名誉や礼儀といった道徳の基礎がわたしたちの周りで崩れかけており、親が道徳の価値を教え尊ぶことに社会は助けを与えておらず、たくさんの文化が価値観を失い、若者は道徳に不信を抱き始めているらしいのですが、何を根拠にファウスト長老がそのような断言しているかについて説明は全くありません。しかしそれはモルモン教会員には「末日だから」という一言で説明がついてしまうものなのでしょう(もっとも末日は百数十年も続いているのですが)。

次にファウスト長老はいきなり、何としても家庭を堅固な物にしなければなりません、と行動を起こすことを求めます。具体的には、家族の祈りは1日1回だけでは足りない、家庭の夕べをたまにしか行わないなら子供たちを十分な道徳的強さで守れるかどうか疑問である、家族の聖文研究を定期的に行わないなら子供に美德を身に付けさせ、社会の退廃に十分抵抗させることはできないなどと、説教や勧告と言うよりは脅迫じみた言い回しで会員に迫ります。しかもそうしたことについては教会ではなく家庭で教えるのだと、教会側の責任はすっぱり放棄してしまうのは何ともみっともないことです。

他にもファウスト長老はしつけや忍耐を持って子供を教えること、甘やかしすぎることが子供に悪影響を及ぼすことなどを指摘します。しかし最終的にファウスト長老の説教は次の点に集約されていきます。それは、堅固な信仰を持つことは子供の人生に大きな助けになるがそれは教会ではなく家庭で学ぶことなのである、ということです。

これは一見まっとうな言葉にも思えますが、よく考えればモルモン教会のこすっからさと限界とを示していることが分かります。現代社会の中で人々が感じる不安を題材にしてモルモン信仰を持つことでその不安を解決できるようなことを言いながら、実は教会側は何も手を出さず、それは家庭でやることなのだ、と会員を突き放しているのです。ファウスト副管長の話によればモルモン教会は何の役にも立たない、子育ては家庭でやれということに他なりません。しかし実際そのとおりなのです。私が伝道中、同僚のアメリカ人が「典型的なモルモン指導者の子供」という言葉を口にしていました。それはわがままで、自分勝手な人を指す隠語でした。彼によれば多くの監督やステーク会長の子供はそんな感じだとのことでした。それが「家庭を大切に」と言ってるはずのモルモン教会内部のナマの声です。

なぜそんな風になってしまうのでしょうか。私も以前は熱心な会員の子供が教会を離れたり、毛嫌いするようになることが不思議でした。今はインターネットの普及によりいろいろなモルモン2世の本音が聞けるようになってきておりその理由もわかったきました。モルモン教会において「家族」や「子育て」は社会に受け入れられようとして耳にさわりの良いキーワードを並べているだけに過ぎないのです。実際はそこに理念も成果もありません。モルモン2世たちはそれを見抜いて去っていくのです。

今回のメッセージの中でファウスト長老はこう言っています。「親の偽善を見ると子供は疑い深くなり、家庭で教えられたことに不信を抱くようになります。子供に正直であるよう期待するならば、親が正直でなくてはなりません」皮肉なことですが、これは正にモルモン教会と会員の関係なのです。教会側の不正や偽善が会員に見抜かれ、会員は不信感を持ち、教会を離れていきます。これまでモルモン教会はそれのつと新たに騙せる人(新会員)を補充してきましたが、インターネットの普及で情報検索が容易になり教会側のウソが隠しとお

来ないでしょうがモルモン教会にとっての「終りの日」は刻一刻と迫ってきているのではないのでしょうか。

## ニュース

### 会報遅配のお詫び

発行担当者の個人的な事情により、本号の発行が予定（2005年10月15日）より2週間程遅れました。原稿をお寄せいただいた方々、読者の皆様には多大なご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

モルモンQ & Aのコーナーは都合によりお休みさせて頂きました。

何卒ご了承ください。

勇気と真実の会は賛助会員募集中です。

詳しくは当会へお問い合わせください。

投稿記事募集

脱会体験、モルモンについて思うことなど、なんでもお寄せください。

文章はプレーンテキストで作成してください。

メールマガジンバックナンバーはこちらから

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

メールマガジンの購読申し込みはこちら

[http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe\\_mailmag.htm](http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/htm/biglobe_mailmag.htm)

- ・発行者 勇気と真実の会 会報編集部
- ・ホームページ <http://jemnet.hp.infoseek.co.jp/>
- ・メールアドレス [jemnet@infoseek.jp](mailto:jemnet@infoseek.jp)

Copyright(c)1999.JEMNet. All Rights Reserved.

無断での転載・転写・複写・転送などは禁じます。

転載・複写の際は、事前に発行者へご連絡ください。

【解除はこちら】

<http://cgi.kapu.biglobe.ne.jp/m/9211.html>

-----  
このめるまがはお客様からのご登録に基づき、カプライトより配信されました。